

日本保険思想史の一局面(3)

— 安藤昌益の思想について考える —

武 田 久 義

はじめに

第1章 安藤昌益の生涯と著作

1. 安藤昌益の生涯
2. 安藤昌益の著作

第2章 安藤昌益の思想

1. 独自の自然思想
2. 自然・活真・互性
3. 直耕
4. 二別

第3章 安藤昌益の思想と生活保障制度

1. 動揺する社会と生活保障制度（以上、前号）
2. 安藤昌益の思想と保険思想（本号。④以降、次号へ）
3. 地域的・時代的制約

第4章 保険と共済の将来

1. ライフサイクルとの関係
2. 成人期の保険・共済

むすび

2. 安藤昌益の思想と保険思想

(1) 人災としての自然災害

安藤昌益は、自然災害とそれに伴う食糧不足に関してどのように考えていたのでしょうか。ひとことで言うならば、この問題に対する安藤昌益の基本

キーワード：保険思想，過渡的社会，備荒貯蓄，協同，合理性

的考え方は、そのような事態が起きるのを未然に防止するというものであった。否。むしろ、自然災害が発生する原因を知り、自然災害が起こらないような社会を築くというものであった。

安藤昌益は、次のように述べている。少々長いが、紹介しておこう¹⁾。

「人間の吸息は人間の気ではなく、天地の気であった。天地の吸息は天地の気ではなく、人間の気であった。つまり、人間の気が呼息として吐き出され天地の吸息となるのであり、天地を運回する気とはこの人間の気である。

したがって、吐き出される人間の気が正常であれば、天地を運回する気も正常で、大風とか大雨といった不正常的な気候となることはなく、万物も順調に生ずる。

つまり、人間の心が喜び和んでいるときは、天地を運回する気も滞りなく感応しあって、薬効のある生物を生じ、めでたいこと、幸せなことが人びとを包む。

ところが、人びとが欲望のとりこになって、働きもせず他人の労働の成果をだまし取ろうと邪悪な心に満ちていると、その悪心によって歪められた邪気が呼息として体外に吐き出され、天地を運回する気を汚してしまう。そしてその邪気が蓄積されると、ついには気の運回に大乱調をきたすようになる。冷気の運回に変調をきたすと、大雨が続いて洪水になる。暖気の運回に変調をきたすと、大旱魃になって穀物が立ち枯れてしまう。風気の運回に変調をきたすと、大風が吹いて家屋や農作物がなぎ倒される。燥気の運回に変調をきたすと、万物が乾燥してしまい実がつかない。蒸気の運回に変調をきたすと、しばしば雷が落ちて人が死ぬ。湿気の運回に変調をきたすと、穀物も万物がかびて腐り、また疫病が流行する。

人びとが表面は権勢や威力を恐れても、内面に怒りが蓄積されると、そ

1)『統道真伝』五「万国巻」(安藤昌益研究会執筆・編集、『安藤昌益全集』第12巻、1985年、農山漁村文化協会、所収)284頁以下。なお、以下、『安藤昌益全集』についての注記は、簡略化する。

れが呼息とともに吐き出されて天の気を怒らせ、それがまた人びとの吸息として入り込み人びとの気を昂ぶらせて遂には兵乱に及んでしまう。

このようにいろいろの災難や災害は、すべて人びとの心の気にもとづき、それが呼息となって吐き出され、天地を運回する気を汚して変調をきたす。

天候の変化として災難がもたらされるため、人びとはこれを天災といっているが、実はもともと人びとの心の中から発生した邪気もたらしたものである。したがって天災ではなく、人災と呼ぶべきものである。」

また、次のように、当時一般に天災と考えられていた災難が天災ではなく人災であることを述べている。

「天災はもとは人間の所業に由来し、それが人間に返ってくるのだ。もとはといえば、人間の邪気が天地の運氣に混入しそれを汚したからである。そのため運氣が異常となり、激変して大風雨・洪水・火災、猛烈な雷・寒冷の災害や兵乱などをひき起こすのだ。すべての異変は人間にその原因があり、それが人間に返ってくるのである。つまりこれらの災害は天災ではなく人災である。」²⁾

「天災というのは天が起こすものではない。もし天が誤ってみだりに災いを下し人を殺すとすれば、それは天徳ではなく悪逆である。天は真正であり、つねに運回して万物を産み出し、それを人に与え、一点たりともよこしまな誤りによる災いをなすことはない。だからこそ天徳なのである。自分の胸中が真正なときは、一点たりともみだりな思いがないことによっても、このことがわかるであろう。そうであるならば何の災いがあるか。自分が誤ってひどい欲心の迷いを発するときは、胸中がみだりに惑ってもろもろの災いを起こす。このことでもわかるように、天に災いがないことはいたって明らかである。天災とはじつは人の迷いや欲であり、人の誤りによる邪気であることもまた明らかである。」³⁾

2) 『統道真伝』四「禽獸卷」(『安藤昌益全集』第11巻、所収) 146頁。

3) 稿本『自然真営道』第四「私法儒書卷一」(『安藤昌益全集』第3巻、所収) 212頁。

そして、安藤昌益は「万国の産物・習俗・言語について」において、次のように記している。

「でたらめな教えにだまされて迷い、欲望ばかりが募って、人々に本来そなわっている清浄な心を見失い、真実の心を曇らせてしまった。そのため人々の心には欲望が渦巻いている。こうして、人間のねじ曲がった心に生じた気が吐きだされ、それが天地を運回する正常な気の運行を損ね、自然界の根源までも汚染する。そして本来ゆがんだところのない自然の気の循環が、人間の妄欲から生じた邪気によってゆがめられ、本来の運回ができずに爆発して、気の運回が狂い乱れ、大雨・大風・洪水・旱魃・冷害・凶作・流行病・兵乱など、思いもよらない災難を招き、混乱の絶えない国になってしまった。

人々が欲に溺れ、歪んだ心が災難を誘発し、それがまた人々をさいなむ。飢饉や病気などの悩みが絶えないのは、すべて人々の欲心がひき起し、それが人々に帰ってきたものであり、自然本来の姿などでは断じてなく、そもそも外来の邪法に心を奪われ、欲に溺れ、心が歪んでしまったためである。」⁴⁾

すでに「昌益エコロジスト説」に関連して述べたように、安藤昌益は自然災害が基本的に人災であるという確信を持っていた。なお、「自然のあやまり」についても、ふれたところである。

それでは、安藤昌益の言うように現実には生きている社会から人々の邪心をすべて払拭し、いわば「自然世」を実現することは可能なのか。もしそれが可能であったとしても、現実の社会でそれを実現するためには、きわめて大きくかつ困難な障碍を乗り越えなければならないことは、明白である。安藤昌益もそのことは知り尽くしていた。だからこそ、門人達を集めた「全国集会」において、そのような社会をつくることが真剣に論じられたのである。そして、そのような社会に至る段階としての過渡的社会が考えられたのであ

4) 『統道真伝』五「万国巻」(『安藤昌益全集』第12巻、所収) 83～84頁。

る。そしてそれは、「真道哲論卷」の「私法盗乱ノ世ニ在リナガラ、自然活真ノ世ニ契フ論」(契フ論)としてまとめられた⁵⁾。

そこで提示された過渡的な社会は、概略次のような内容を持っていた。①権力の改変(正人を立てること)と②村単位の自治政治である「邑政」の実現。

安藤昌益は次のように述べている。

「搾取・反乱・罪惡・混乱がとめどもなくくり返すという歴史の愚劣なあやまりを見極めたからこそ、今ただちに上下関係を全廃することができないなら、ここに新たな上下関係を立てつつも、実質的には上下の差別のない自然そのままの社会に合致するような、過渡的社会の構想を明らかにし、これを論じたのである。

いずれにせよ、幾星霜を経る間に、正人が上にも現れ、下にも現れるようになれば、必ずや、搾取もなく、反乱もなく、迷いも欲もない、自然そのままの社会に到達するであろう。」⁶⁾

まず、①権力の改変から見ていくとしよう。これに関して、安藤昌益は次のように述べている。

「あやまりによってあやまりをなくしていく方法がある。本来はあやまりである上下という仕組みで、しかも階級社会の上下のような支配・被支配といった敵対関係に陥らない方法がある。」⁷⁾

「階級社会で支配者が、家臣とその一族を少しでも多く抱えようとするのは、反乱を恐れるためである。そこで過渡期の社会では、上に立つ者が、

5) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論卷 問答編」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 267頁以下。

6) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論卷 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 291頁。なお「正人」について、同書は113頁において次のように説明している。「自然真営道を体得し実践する人間。支配者である聖人の対極にある人間。なお、たんに正しい生き方をする人の意味に使われることもある。」

7) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論卷 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 275頁。

家臣を数多く抱えたりせずに、ただ反乱が起こらないよう心をくたくべきである。(中略)無用の家臣を抱えず、みずからの田地を一定範囲に定め、これを耕して一族の生活をまかなうようにするのである。諸侯もこれに準じて、それぞれ国主としての田地を一定範囲に定め、相応に耕すことによって一族の生活をまかなうのである。諸国もすべてこのようにして、下、民衆もみな一様に耕作すべきである。』⁸⁾

さらに、家臣団・武士階級の解体、軍備の全廃、全国の農地の国有化、徴税の法なき無年貢等が語られている。なお寺田五郎氏は、この件に関して詳細に説明している⁹⁾。

次に、②の邑政の実現について語られる。邑政とは何か。それは、村を単位とする自治政治である。安藤昌益は次のように記す。

「万が一、村の中に生まれ損ないのならず者が出たばあいは、その処刑を一家一族に委ね、上が直接手を下してはならない。これを村単位の自治政治とし、「邑政」と言う。こうして一族ごとにその内部であやまりを糺しあうならば、引き続いてならず者が出ることはない。』¹⁰⁾

それでは、過渡的な社会における人々の「生活保障制度」はいかなるものか、そしてそこにおいては「保険」はどのような形態をとるのか。

(2) 保険との共通点

ここでは、保険制度と安藤昌益の思想についての共通点を考えてみたい。これまで見てきたように、安藤昌益の思想は、表面的には保険思想とは無関係である。しかし、その本質的側面においては、深い内的関連を有していると思われる。また安藤昌益は、生活保障制度に関連しては多くを語っていない。彼の記述の中から、保険思想に関連すると思われるものを、筆者なりに

8) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 276頁。

9) 寺尾五郎、『安藤昌益の社会思想』、1996年、農山漁村文化協会、207頁以下参照。

10) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 290頁。

抽出してみることにする。

その前にここで、保険の意義を確認しておきたい。周知の通り、保険の意義については諸説が存在する。筆者は、とりあえず保険を次のように定義しておく。

「保険とは、特定の偶然的事故に関連する経済上の不安定を除去・軽減するために多数の経済主体が結合し、合理的計算に基づいて共同的に準備を行う経済制度である」。

そしてこれを①保険の与件：特定の偶然事故に関連、②保険の目的：経済上の不安定の除去・軽減、③保険の組織：多数の経済主体の結合、④保険の技術：合理的計算を基礎、の四つの要素に分けて考える。これらの要素を一部修正しつつも、基本的にこれを基礎として論を進めていきたい。

ここでは、安藤昌益の思想で保険の要素と関連を有すると思われるもの、すなわち①備荒貯蓄、②多数の自由な人々による協同、③合理性、④協同の後退、を挙げ、以下説明していくこととする。

①備荒貯蓄

これは、「保険の予見」および「保険の目的」に関連している。

安藤昌益が生きた時代、偶然的事故に関連した対策および生活保障制度の中心を成したものは、非常時への備えすなわち備荒貯蓄であった。この他、講、無尽等も存在していたが、それらはあくまでも補完的なものでしかなかった。そして、備荒貯蓄は基本的に村落等の共同体において行われた。そして安藤昌益は、とくに備荒貯蓄を重視していたと考えることができるだろう。寺尾五郎氏は、次のように記している。「昌益の著作の全編を埋めつくしているものは、支配者の悪についての怒りである。その不耕貪食、暴戾と欺瞞、詐欺と醜悪について綿々と書かれているが、被支配者の側の惨状についてはあまりふれられていないというのがいつわらざる実情である。民衆の抵抗や闘争についてもふれるところはないし、百姓一揆などのことばは一語もない。(中略)しかし例外は飢饉についての叙述である。これは昌益のいたるところ

でふれられており、大衆とともにその惨苦を経験した者の悲痛な呻きを感じさせるものがある。」¹¹⁾

ところで、安藤昌益は、次のように述べている。

「端的に言えば、道とは直耕して食うことだ。生きて真なる道とは、これ以外でも以内でもない。」¹²⁾

「夫レ飲食ハ、即チ自然真営ノ道也。無始無終ナル活真アルハ、唯飲食ノ為也。(中略)故ニ天地・人・物、唯此飲食ニシテ無始無終也。故ニ活真・天地・人・物、絶ユルコトナキハ飲食ヲ以テ也。故ニ活真ノ道ノ営トハ、飲食ノ名也。」¹³⁾

そしてこれに関連して門人の村井中香は、前述した「全国集会」において次のように述べている。

「この食うという活動をいいかえれば、活真が直耕しているということだ。したがって活真の直耕とは、ひとえに食うということ以外でも以内でもなく、そのことだけが自然の生きて真なる姿なのである。」¹⁴⁾

それは小生態系としての人間が「現実に」生きていくうえで、どうしても必要なことだったからである¹⁵⁾。

すでに見たように、自然災害を含めたすべての災難の根本的原因は、人々の邪心にあった。したがって安藤昌益にとっては、人々の邪心をなくすことが根本的な対応策であった。

寺尾五郎氏は、次のように記している。「自然の気行にも変調はあり、それも病の原因とはなるが、それは自然の回復力で治せる「小変」にすぎない。

11) 寺尾五郎、『先駆 安藤昌益』、昭和51年、徳間書店、281～282頁。

12) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 問答語論」（『安藤昌益全集』第1巻、所収）247頁。

13) 『真斎謾筆』「地」（『安藤昌益全集』第15巻、所収）271頁。

14) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 問答語論」（『安藤昌益全集』第1巻、所収）248頁。

15) 大生態系と小生態系との交流には、呼吸や飲食その他等がある。昌益の場合は、最も中枢をなすものとして、飲食を考える。（寺尾五郎、『安藤昌益の自然哲学と医学』、1996年、農山漁村文化協会、191頁）。

自然の気行が邪気にまでなると、それが病気という「大変」のことになるのである。それはすべて人間の側からの「汚邪氣」に発しており、社会矛盾が根源であるという。¹⁶⁾

それでは、現実の災害に対してはどのように対処すべきなのか。安藤昌益は、次のように記している。

「穀精から生じた最初の人間が、次々に子孫をふやして数多くなり、農業がひろまって家並みも増し、互いに親しみ合い、喜びは分かち合い、苦しいときは助け合う。」¹⁷⁾

このことについて、安藤昌益は社会の基本を一夫一婦の勤労家庭に置き、そのうえで「人と人との本来的つながり、相互扶助のあり方について、農村共同体における近隣家族の結合の中に置いている」と見ることができる¹⁸⁾。

なお、寺尾五郎氏は次のように記している。「『契フ論』のなかには、貧窮者の救済とか、無料の施薬院とか、お救い小屋とかいったいわゆる上からの恩恵下賜的な福祉政策については一言もふれていない。これも昌益の社会政策が、上からの救恤策でも、救済の嘆願でもなく、小農自立を根幹とした闘いの政策であることを示すものであろう。」¹⁹⁾

②多数の自由な人々による協同

これは、「保険の組織」に関連した事項である。

安藤昌益は、少なくとも自己と他者との関係を明白に意識していた。すなわち、きわめて先駆的ではあるが、「自由な」人間を考える。安藤昌益は、目的論的な大自然の理法（自然真営道）に回帰し、実践することによってのみ、

16) 寺尾五郎、同書、195頁。なお、若尾政希氏は、次のように安藤昌益における変化を指摘している。「昌益が確龍堂正信から確龍堂良中へと著述号をかね、(中略)『統道真伝』を執筆したのは、宝暦期の前半と推定される。この良中時代の著作からは、仁政を施せば必ず豊作となるという主張は姿を消している。」(若尾政希、『安藤昌益から見える日本近世』、2004年、東京大学出版会、354頁)。

17) 『統道真伝』四「禽獸卷」(『安藤昌益全集』第11巻、所収) 87頁。

18) 石渡博明、『安藤昌益の世界』、2007年、草思社、216頁以下。

19) 寺尾五郎、前掲『安藤昌益の社会思想』、232頁。

人間は自然と他者に対して自由でありうるとする²⁰⁾。そして自由であることは、他者との関係において確立されるのである。医師である安藤昌益は、人間の身体の諸器官との関連で、自由を説明する。すなわち、全身体における諸器官は、天地自然における諸部分と同じように、目的論的にとらえられるが、それは生成の運動それ自身のなかに一定の目的性を内包しているとする意味だけでなく、諸器官の働きがけっして自己目的的ではなく、つねに遠心的に他者を目的として志向する。ここからさらに、人間のもっとも自然的な情念として、他者への寄与ないし献身が強く主張されるのである²¹⁾。

以上のように安藤昌益は、積極的に他者に寄与し、奉仕することに、人間らしさ、社会的存在としての人間の存在理由をみる。それは他者を手段として措定するのではなく他者をあくまで目的とし、他者への献身を、生きることの意味の第一義的なものとしてとらえることである。太陽の日照が人間的な生活を保障するように、他者に与えるとは、他者の人間的欲求、人間的自然を発見させるべく、他者を積極的に志向することにほかならず、したがって、単なる自己犠牲ではありえないのである²²⁾。そしてこれは、協同（共同）へと導かれる。

安藤昌益は、次のように述べている。

「宇宙は天地で一体、男女一対で人間となるのが、自然の進退運動による万物の表れであり、万物を貫く法則性であるから、人類はすべて友と言える。すべての家族は、皆己れの家族同様の存在であり、人類は一大家族である。」²³⁾

そしてこの協同の実現は、「直耕」を通じて行うことができる。すなわち、自己は、自然と他者ととともに共同労働＝直耕を営むことによって、この本源的な共同性と相互自立性を積極的に顕在化し、現実化するのである。それは、

20) 安永寿延、『安藤昌益と中江兆民』、1978年、第三文明社、45頁。

21) 安永寿延、同書、42頁。

22) 同書、18頁。

23) 稿本『自然真営道』第二「私製字書巻二」（『安藤昌益全集』第2巻、所収）339頁。

「直耕」が単なる労働ではなく、他者への積極的かつ自発的な献身によって、社会的自由を実現しようとすることを意味している。そして、「直耕」を主体的に営むことが、すなわち自由を獲得することにもつながるのである²⁴⁾。そしてそれはまた、人が社会的孤立性を免れる途でもあるのである。以上のように、他者への献身の具体化でもある「直耕」によって実現される協同は、それを通じて個々人の自由をも実現するという循環する円環構造を創り上げているのである。

安藤昌益は次のように記している。

「この天地は万物を生み出しこそすれ、奪い取ることはしない。」²⁵⁾

「天道ハ与ヒテ受クルコトヲ為ズ」²⁶⁾

ここで、与えるの「与」という漢字は、語源的には、二人で協力して物を持ち上げることを意味していることを確認することは、意義あることである。そしてまた、与えることは、相互に贈与することでもあるし、同時に互性の関係にある対のものが協同して働くことという意味にもなるのである²⁷⁾。

そして以上のことは、すでに述べた「互性」の関係と深い関連を有している。

すでに述べたように、「互性」とは運動的側面から見れば小さく、あるいは大きく進んだり退いたりする「活真」の永遠の自己運動である。そしてそれを存在するものの側面から見れば、相関連する存在すなわち相対的な存在として理解することができる。万物は、このような「互性」の関係においてのみ存在することができるのである。それは、あらゆる存在が互に関連した他者の存在を前提としているという主張である²⁸⁾。

自己と他者もまた、当然ながら「互性」の関係にある。そして安藤昌益に

24) 安永寿延、前掲書、52頁。

25) 稿本『自然真営道』第四「私法儒書巻一」(『安藤昌益全集』第3巻、所収) 124頁。

26) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 301頁。

27) 安永寿延、前掲書、71～72頁。

28) 安永寿延、『安藤昌益』、1992年、農山漁村文化協会、6頁。

あつては、「互性」の関係にある自己と他者の間に協同関係が形成されることが前提とされているのである。それは、「互性」には「相互性・相互化に意味の力点がある」²⁹⁾からである。すなわち「互性」とは、「媒介物に基づく交換によらない、直接的な人間関係の理念的実現にほかならない」³⁰⁾からである。そしてそれは、「互性とは、自己は他者であり、他者は自己であるという関係に媒介された、自己と他者の本源的な共同性と相互自立性を表している」³¹⁾からでもある。まさに「互性」とは、「単なる相互依存の論理ではなく、相対的關係のなかでの相互自立の論理」³²⁾なのである。

ところで、安藤昌益は次のように記している。

「自然の真の道とは無始無終なので、天と海とで一つの宇宙、男と女とで一人の人間である。」³³⁾

安藤昌益は、しばしば「男女」と書いて「ひと」と読ませている³⁴⁾。すなわち、男と女という「互性」の関係でもって一人であり、それは同時に「万々人にして一人」へとつながるものである。それは、単なる相互依存の論理ではなく、相対的關係のなかでの相互自立の論理である。「男女にして一人」という命題は、人間の自然性に根ざしながら、その社会化を志向するものである。やがてこの命題が、「万万人にして一人」という新たな命題へと拡張され、人間の社会性に重心が移動するのである³⁵⁾。

③合理性

これは、「保険の技術」に関連している。

周知の通り、保険は「大数の法則」をその技術的基礎に置いている。それ

29) 安永寿延、前掲『安藤昌益』、4頁。

30) 安永寿延、同書、75頁。

31) 安永寿延、前掲『安藤昌益と中江兆民』、51頁。

32) 安永寿延、前掲『安藤昌益』、70頁。

33) 稿本『自然真営道』第四「私法儒書卷一」(『安藤昌益全集』第3巻、所収) 229頁。

34) たとえば稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論卷 問答語論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 212頁。

35) 安永寿延、前掲『安藤昌益』、70～71頁。

は、数学的合理性によって貫かれている。当然ながら、安藤昌益の時代には「大数の法則」は知られていなかった。したがって、安藤昌益の思想には様々な合理性は見られるものの、時代的制約を受けているのである³⁶⁾。

しかし安藤昌益には、以下に記すような合理性を見ることができる。

a. 安藤昌益は合理的な考えを有していた。そして、彼の思想全体において合理性が貫徹していると言うことができる。たとえば、永田広志氏は次のように記している。「陰陽概念の神秘化に反対し、神をも単に自然そのものとして、又は自然の運動の「妙」・「真」を云い表す概念としてしか認めないのは合理的な見解で、唯物論的自然観への傾斜を示している。」³⁷⁾そして、安藤昌益のこのような合理的な思考は、彼の著作全体に一貫して見ることができる。事例をいくつか挙げておこう。

「幽霊とは、自分の心中の思いが執着することによって起こる錯覚で、怪奇なことではない。」³⁸⁾

「幽霊というものも、これまた自然には絶対に存在しない。」³⁹⁾

「狐付きというのは、自分の心中に富貴を願う迷いがあるからで、狐が取り付くわけではない。」⁴⁰⁾

「…不思議に思われることや奇特に感じられることは、すべて自分の心中の蒙昧さや迷いに由来するもので、(下略)」⁴¹⁾

「自然においては吉と凶とで一事なのだから、吉になずむことなく、凶を捨て去らず、吉と凶とで一道である。ところが凶を捨て去れるものと思い込み、吉と凶とを二別としていることは、はなはだしい誤りである。吉

36) ヨーロッパ各地での自然観察に基づく膨大な知識の集積をもとに分類・体系化されたリンネの『自然の体系』(1735)やダーウィンの『種の起源』(1859)に、昌益は接することはできなかった。(石渡博明、前掲書、123頁)。

37) 永田広志、『日本哲学思想史』、1967年、法政大学出版局、155～156頁。

38) 『統道真伝』一「糺聖失」(『安藤昌益全集』第8巻、所収)157頁。

39) 『統道真伝』四「禽獸卷」(『安藤昌益全集』第11巻、所収)120頁。

40) 『統道真伝』一「糺聖失」(『安藤昌益全集』第8巻、所収)158頁。

41) 『統道真伝』一「糺聖失」(『安藤昌益全集』第8巻、所収)159頁。

と凶とは本来一つのことの両側面なので、切り離して捨てたり加えたりできるものではない。」⁴²⁾

b. 1760年頃に開かれた一門の全国集会での討議資料であり理想とされる人物を描いた「中身の弁」には、次のようにむやみに荒唐無稽な作り話を信じないという、懷疑精神の持ち主であることが要請されている⁴³⁾。

「荒唐無稽な作り話を信じない。」⁴⁴⁾

このように、非合理的なものを批判する合理的な精神がうかがわれる。

c. 男女は対等であること、そして男女の肉体的な差異に基づく役割分担について言及している。

「天地宇宙は一つの統一体であって、天と海とに上下の差別がないように、万物はすべて相互に対立し依存しあうという連関した存在で、その間になんら差別はない。同じように人間も、男と女ではじめてまっとうな一人の人間となるのであって、男と女とに上下の差別がないように、人々は相互に対立し依存しあうという連関した存在で、その間になんら差別はない。」⁴⁵⁾

「男は耕作することを知り、女は機を織ることを知って、自発的にこれを営むのであり、(下略)」⁴⁶⁾。

「互いに穀物を耕し麻を織るという労働を通じて、人間の生産と再生産は絶えることがない。これこそ、根源的な物質である土活真が小宇宙とし

42) 『統道真伝』一「紀聖失」(『安藤昌益全集』第8巻、所収) 167頁。

43) 石渡博明、前掲書、122頁。なお、寺尾五郎氏は、この件に関して次のように記している。「それが議案としてあらかじめ各地の出席予定者に届けられていたかどうかは不明だが、少なくとも集会の席では全員がこの一文を手にし、その内容の順序を追いながら発言していることは確実である。それは形式的な討議資料・参考資料というよりは実質的な議案となっている。」(寺尾五郎、前掲『安藤昌益の社会思想』、198頁)。

44) 稿本『自然真営道』第三十五「人相視表知裏巻一」(『安藤昌益全集』第6巻、所収) 260頁。

45) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 268頁。

46) 稿本『自然真営道』第四「私法儒書巻一」(『安藤昌益全集』第3巻、所収) 151頁。

て現れた、人間男女の生産活動であり、また人間の存在法則であると言える。⁴⁷⁾

「天と海との矛盾運動とは、万物生成の生産活動だ。この生産活動に背いているものが搾取と争乱だ。男と女の相互作用とは、男は耕し女は織るという生産労働だ。これに背きこれをふみはずす者が、搾取と争乱をひきおこす。」⁴⁸⁾

すでに述べたように、安藤昌益にあっては男女にして「ひと」である。「男女」は、自然の根幹である「互性」の関係にある。それゆえ、男女の肉体的差異に基づく役割の分担という合理的関係が生じているのである。

d. 全体と個、共通と差異、普遍性と多様性等に関する合理的な認識。

「全国集会」の中で、北田静可は次のように言う。

「万物は、千差万別の個性をもち画一的なものではない。しかし人間男女は、千差万別の人びとではなく、人類という一体的存在である。」⁴⁹⁾
安藤昌益は次のように記している。

「根源的な一真が自己運動してさまざまのすぐれたはたらきをするのは、五行の進退する自己運動である。このように五行のはたらきにおいては共通であっても、その進退による発現のしかたに違いが生ずる。この違いがあるから一人が万々人となってあらわれても、実はまったく同一である。まったく同一である万々人・万々形・万々心を、一人・一形・一心とみても本質においては変わらない。しかしすべての人間の顔や心が同じであって

47) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 268頁。

48) なおこれは、安藤昌益の言を引き継いで中村信風の述べたものである。(稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 問答語論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 209頁。「問答語論」は、「良子門人問答語論」で、これは「全国集会」の内容を議事録風に整理したものである。討議の進行過程は、大きく六つに分けられる。そして全体の流れは、「いかに生きるべきか」に発して「何を為すべきか」に至るといふ、実にみごとなうねりを見せている。(寺尾五郎、前掲『安藤昌益の社会思想』、199～200頁)。

49) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論巻 問答語論」(『安藤昌益全集』第1巻、所収) 212頁。

は不便で生きてゆくことさえできず、世の中はなりたたない。人びとの顔や心がそれぞれ違ってこそ、万国が不便なく世界がなりたってゆく。＜(欄外) 万々人・万面・万心でありながら、本質的にはただ一人であり、一心・一面というこの事実がなければ世界はなりたたない。万々人で一人、万々心が一心であるからこそ、この世界がなりたつのだ＞。⁵⁰⁾

男女が「互性」の関係であるのと同様、己と他者の関係もまた「互性」の関係にある。そして「男女にして「ひと」」の関係は、「万々人にして一人」の関係ともなる。そして「男女」に役割分担があったように、「己と万人」の関係には異なるものがある。すなわち「万々人にして一人」の関係は、同一にして多様な関係にあるのである。そしてまた、「万々人にして一人」の関係は、「単に上下関係を否定する平等概念であるだけでなく、横の関係をも包含している」のである⁵¹⁾。

近代的個にとっては「わたしが他人と同じでないから、わたしが存在する」という命題で、自己の存在理由が語られる。つまり、自分がいかに他人と異なっているかに力点が置かれるのに対して、安藤昌益の場合は「他人がわたしと同じではないからわたしが存在する」と他人が自分といかに異なっているかということが、「わたしが存在する」ことの契機となる。そしてこの場合、単に自己と他者の違いだけが自己の存在の契機となるのではなく、この違いこそが、自己と他者が互性的な関係を取り結ぶことを可能とするのである⁵²⁾。このことは、重要である。すなわち、互性関係にある者は、お互いに自己の長所（すなわち相手にとっては、多くの場合、短所である。）を出し合うことによって、お互いの短所を補い合うことが可能となるのである。

このほか、三枝博音氏は、安藤昌益の学問が「安永・天明・寛政・文化の頃」にあって合理的な科学思想の起って来るための培養となり刺激となってい

50) 『統道真伝』四「禽獸卷」(『安藤昌益全集』11巻、所収) 81頁。

51) 安永寿延、前掲『安藤昌益と中江兆民』、124頁。

52) 安永寿延、前掲『安藤昌益』、72頁。

る」と記している⁵³⁾。

e. 平等の思想

平等の思想は、安藤昌益の著作において終始一貫して見られるものである。そしてこれは、「日本思想史上にはじめてあらわれた徹底した人間平等観である」⁵⁴⁾。

いくつか、挙げておこう。

「人は万々人で一人であり、それが自然なあり方である。君主とか下民とかは、聖人が天下を掠め取るためにでっちあげた差別であって、天地自然にはありえないことだ。」⁵⁵⁾

「上も人であり、下、民衆も人である。」⁵⁶⁾

「天下とは万民の天下であり個人の所有になるものではない。」⁵⁷⁾

「そもそも天地とは自然の自己運動によって成り立っており、いつ始まるでも終るでもないものであり、人間はこの自然の進退運動によって生まれるのだから、男女で一人であるという天下の法則とは、ただ全員が生産労働を実践し、老人は成人した子供に養われ、壮年の者も老いたときにはまたその子に養われるという秩序で天地と人間とは一体となって活きているというのに、なんで四民などという身分制度が必要であろう。」⁵⁸⁾

「本来世の中とは一体のもの、すなわち何万人いようと平等であるべきものにもかかわらず、これに氏族と下民などという差別的な身分制度をこしらえあげ、これを破壊するとは、非道の極みである。」⁵⁹⁾

ハーバート・ノーマンは、安藤昌益の平等思想について、次のように記し

53) 三枝博音、「十八世紀後半における日本の思索者達」(『思想』292号, 1948年10月, 所収) 599頁。

54) 寺尾五郎, 前掲『安藤昌益の社会思想』, 281頁。

55) 稿本『自然真営道』第六「私法儒書卷三」(『安藤昌益全集』第4巻, 所収) 165頁。

56) 稿本『自然真営道』第二十五「真道哲論卷 契フ論」(『安藤昌益全集』第1巻, 所収) 299頁。

57) 稿本『自然真営道』第四「私法儒書卷一」(『安藤昌益全集』第3巻, 所収) 220頁。

58) 『統道真伝』「糺聖失」(『安藤昌益全集』第8巻, 所収) 144頁。

59) 稿本『自然真営道』第二「私製字書卷二」(『安藤昌益全集』第2巻, 所収) 358頁。

ている。

「人々は異なった経験を通り異なった道を辿っても、ついには同じ目標に達するものである。昌益の生きた社会的、知的環境は古代のエピクロス派の人々、17世紀イギリスのレヴェラーズ、18世紀フランスの百科全書家、大北米共和国の始祖たちのそれと全く異っていた。しかし昌益の精神はこれらの人々のすべてに近い。古典的漢学ことに日本の思想家の解釈に養われながら、昌益の達した結論は全世界の自由と平等の使徒たちが使ったと内容において本質的に同じ言葉で書かれていた。それで、昌益はあの不可思議な書物、易経におそらく間接の影響を受けたところの東洋医学を根拠としながら人間本来の奪うべからざる平等を主張することができたのであった。」⁶⁰⁾

(たけだ・ひさよし／経営学部教授／2011年4月25日受理)

60) E. ハーバート・ノーマン、大窪愿二訳、『忘れられた思想家』（下巻）、昭和25年、岩波新書、97～98頁。